

特集 第14回 外国人市民による日本語



最優秀賞

『焼肉』
徐 康源(ソ・カンウォン)

皆さん、こんにちは。韓国の檀国(タングク)大学の交換学生として去年9月から専修大学で勉強することになったソ・カンウォンと申します。

突然ですが皆さん、焼肉は好きですか？私は大好きです。あまりにも好きすぎて焼肉店でバイトをしたことがある位です。韓国にも焼肉はありますが、日本の焼肉とはどうやら少し違うようです。これから皆さんに、私が感じた日本と韓国の焼肉の違いについてお話ししたいと思います。

まず初めに日本人と韓国人の来客スタイルについてです。韓国で食事をしにお店へ行くときは、基本的に2人以上で行きます。しかしバイトをしていて日本人のお客さんが一人で来店する姿に何度も遭遇しました。一人で漫画を持参して、その漫画を片手に肉をもくもくと焼き始めるではありませんか！私は初めてその光景を見た時、本当にびっくりしました。友達がいなくて可哀想な人なのかなあ～と初めは思っていたのですが、どうやらそうではないようです。日本では「お一人様」といった言葉があるように、一人でご飯を食べたりすることが当たり前となっているのですよね。韓国では絶対にありえない光景なので、このことが同じ顔なのに日本人っておもしろいなあ、と思ったきっかけになったのです。

私はそれから焼肉の食べ方について色々な場面で韓国とは違うということを体験することが出来ました。

私の働く焼肉店で韓国人のお客さんがサンギブサルという豚バラ肉を4人前注文していました。しかし私以外の日本人スタッフは怪訝そうな顔をしています。なぜでしょうか。それに反して、隣の席に座っていた日本人のお客さんはカルビ、ハラミ、タン塩、チヂミなど多彩なメニューを注文していました。そうなのです。日本人が少しずつ色々な種類の肉を味わうことを楽しむことに反して、韓国人は一種類の肉で統一する傾向があります。韓国で日本人のような注文をすればお店から追い払われてしまうかもしれません。

また、キムチや、サンチュなどは韓国ではサービスでついてくるのが当たり前ですが、日本ではこ

れらも全部お金を出さなければならないのです。私もはじめは「キムチ 400円」の文字に目を疑ってしまいました。

次に肉の焼き方に注目していると、またもや違いを発見しました。韓国人男性二人は一度に2人前以上もの肉を一気に焼き始めました。そして矢のように食べ始め、二人で4人前もの肉を30分もかけずに食べ終わってしまいました。しかし網の上をよくよく見てみると、ちらほら黒い塊が見えるではありませんか。この黒い塊の正体が皆さんはお分かりになるでしょうか？そうです、この黒い塊の正体は焼けてしまった肉なのです。韓国人は何でも速くしようとする傾向があって、短気な民族だとよく言われますがこのお客も然り、一気に大量の肉を焼いてしまった結果、焦げて食べられない肉が残ってしまったのです。

それに反して隣の席にいた日本人のお客さんは一人一人が一枚ずつ自分の分を焼いて食べ、また一枚ずつ焼いては食べる...ということを繰り返しているではありませんか。見ている私の方が歯がゆいほど、一体いつになったら全部食べ終わるのかという速度で食べていました。私の見る限り日本人のほとんどがこの様にゆっくりゆっくり味を楽しみながら食べるという傾向にあるようです。

食べる速度と言えば、私は今まで韓国人は大食漢が多く、日本人は少食であるという風に思っていました。なぜなら韓国人は食べるスピードが本当に速くて、一気に沢山の量を食べるからです。しかし少食と思っていた日本人はゆっくりゆっくり食べはじめ、後から何度も何度も少量の注文を繰り返します。もう終わりかな、全部食べてもう帰るのかなと思いきや、また肉を追加で注文し始めます。その上、最後に石焼ビビンバなどの食事類まで食べるセンスを発揮します。私はバイトをして初めて日本人が少食だということが迷信であることを身をもって感じたのです。

日本にいる間、韓国から友人が遊びに来ましたがソウルと何が違うのだろうか？本当にここは外国なのか？と言うほど韓国と似ているという反応でした。しかし実際に生活してみれば韓国と日本にはかなり異なった点が多いということが分かります。例えば今までお話しした焼肉について、皆さんはどう感じられましたか？こんなに小さいこと一つとっても、韓国と日本ではこんなに違うのです。こんなに小

スピーチ コンテスト

さいことにも数えきれないほどの違った点があるなんて、本当に面白いと思いませんか？私はもっともっと日本を知りたいと思いました。私はこれからも日本にいる間、良い部分や面白いことをたくさん発見して身につけ、そのお返しに日本にはない韓国での文化や考えを伝えられたらな、と思います。

皆さんはこれからどんな面白いことに気づくことが出来ますか？お互い良い発見が出来ることを祈っています。

ありがとうございました。



国際交流協会優秀賞

『やっぱり私も
変わってしまった』
ムニョス・ディエゴ・アロンソ

1999年に私は仕事で日本に行くことになりました。ピザを取りに日本の領事館へ行ったとき、私は初めて日本語が話せるオーストラリア人に会いました。でも、その人は普通のオーストラリア人とちょっと違ってました。

領事館の中で、革靴の代わりにスリッパを履いているし、ズボンがウエストの上まで上がっているし、おまけに電話で話しながらおじぎもしていたからです。

これを見て、領事館と一緒にいった友達と「日本に行っても、絶対にあんな人にならない様に注意しよう」と約束しました。

3ヶ月後、日本に到着して日本のホテルの仕事が始まりました。その時の私は日本語がぜんぜん出来なくて同僚としゃべるのはとても難しかったです。でも、少しずつ簡単な日本語を覚えていきました。

ある日、一緒に働いている人が私に「ツレイー」と早口で言いました。「ツレイー、スレイー、これは何だっけ」。もう一度その人が「シツレイー」と言いながら、右手をこういうふうにしました。「ああ！この手振りの意味は失礼いたしますという意味なのか」と気がつきました。

そういえば、電車の中で私の前を通るとき、よく日本人がこうやっていました。あれは、言葉じゃなくて身振りで失礼します、という気持ちを表していたのです。

それから、6ヶ月、仕事でいろいろな身振り手振りを習いました。例えば(アクション)これは何？

と思いましたが、6という意味です。こうしたら(アクション)「彼女いるの?」という意味です。それから、正しいおじぎのやりかたはこうです。丁寧におじぎをすれば、言葉を使わなくても、尊敬の気持ちを伝えることが出来ます。

一年後、私は毎日手振りを何回もして、仕事でお客様におじぎを100回以上していました。

契約が終わり、オーストラリアに帰国して、もう一回オーストラリアの会社に入ったとき、間違っ「P basure to meet you」と社長におじぎをしてしまいました。社長は大丈夫か?という顔で私を見ていました。さらに、(アクションをしながら)同僚に「I m 26 years old」と言って、変な顔をされました。

いつのまにか、私も変なオーストラリア人になっていたのです。

あれから7年、私は留学生としてまた日本へ来ました。

あの時と比べて、私の人生観は大きく変わりました。私のような外国人が日本語を話すと、日本人はみんなびっくりしますが、身振り手振りをすることで会話がスムーズになるし、相手が私の話していることに耳をかたむけ、一緒に理解してくれるようになりました。前の私は、あの領事館の人みたいに変わりたくない、と思っていましたが、今はその国の文化に合わせて、自分も変わらなければならない、と思います。

今、日本人もたくさん英会話を習っています。でも教室では、このようなことは習えません。みなさんも、ぜひ、その国へ行って、変わることを恐れず、その国の生活に飛び込んでみてください。

ご清聴ありがとうございました。



川崎ライオンズクラブ優秀賞

『「不完全」な国、
でも好き!』
柳 燕玉(リュウ・エンギョク)

「桃太郎さん桃太郎さん、お腰につけたきび団子、一つわたしにくださいな。」寝つきが悪い私の枕元で、おばあさんはいつも優しい声で桃太郎の物語を話し、この歌を歌ってくれました。私はこのお話から日本という国があることをなんとなく知りました。

中学の時、授業で製品の生産地について勉強をしました。家に帰って、家中を見てみたら、テレビ、冷蔵庫など、家電製品はほぼ日本製だったので。庭にある車もホンダ、私は知らないうちに日本という国と一緒に生活していました。

高校の時、東京ラブストーリーを始め数多くの日本のドラマが台湾で放送され、画面を通して日本人の

生活を覗くことが出来ました。小さい頃からの日本に対する気持ちは一気に高まって、大学に進学するとき、迷わず日本語学科を選びました。最初の海外旅行もやはり日本でした。そしてついに去年の4月、私は憧れの日本に留学しました。

旅行が大好きな私は休みのたびに、いろいろな所を旅行しました。大阪城に向かう途中、大阪城公園を通ったとき、大きな青いシートがたくさん並んでいるのが気になり、案内してくれた友達に聞きました。

「ね、あのブルーのやつ、なあに？屋台かな？」と、私が指さしながら、近づこうとすると、「ホームレスの家だよ。早く行こう。暗くなると、危ないから。」と友達が私を引っ張って早足で歩き始めました。

正直、私はちびまるこちゃんのようなビククリ顔になってしまいました。大阪城と言えば、関西旅行には欠かせない観光スポットです。それなのに、そのすぐそばにはホームレスの家。今まで見たことのない光景にショックを受けました。私の中の美しくて豊かな日本のイメージとはあまりにも違うものだったからです。

もともと日本の食べ物が好きだし、電車も便利だし、日本での生活は期待していた以上に快適でした。でも、テレビで報道されたように年金問題、台湾人にも有名な「白い恋人」の食品偽装問題など、この一年間、日本では不祥事が沢山発覚しました。そんなニュースを見て日本が嫌になってしまった時期もありました。

でも、よく考えてみると何の問題もない完全な国などありません。他の国から見れば日本の問題は日本人が悩むほどでは無いのかもしれませんが。

日本は長い歴史と文化、さらに進んだ技術を持つ、豊かな国です。完璧を求めすぎているのではないのでしょうか？最近の日本は自信を無くして元気が無いように感じます。

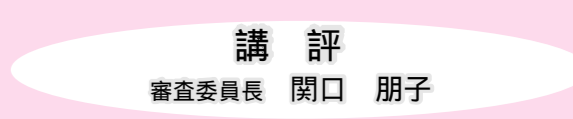
私のように、日本のことが大好きな外国人は沢山います。日本人は日本人であることの誇りをもっともっていいのではないのでしょうか。

中にいると見えないことも、外からは良く見えるようになります。私は日本に来てから、このことを実感しました。台湾にいたとき、私はどちらかというと台湾の悪い点はばかり見ていたように思います。

恥ずかしいことですが、憧れの日本にばかり目が行ってしまい、台湾のことには、あまり興味もっていませんでした。だから、本当の意味で、私は一度も台湾の良さを体験したことが無いのかもしれませんが。でも、日本に来て、改めて自分の国に関心をもつようになりました。台湾に戻ったら、今までやらなかったことを体験してみようと思います。どこ

にも完璧な国はありません。これは日本に来て一番の感想です。みなさんも私の話を聞いて、もう一度自分の国の良さを感じてくだされば嬉しく思います。

ご清聴ありがとうございました。



講評
審査委員長 関口 朋子

コンテストも14回目になり、自分の言いたいことを自分の言葉で落ち着いて伝えられている方が増えてきたというのを実感しました。

最優秀賞、韓国の徐康源さんの話は、テーマを焼肉の食べ方に絞り、こんなにも小さなことが、こんなにも違うということが十分伝わりました。国際交流協会優秀賞、オーストラリアのムニョス・ディエゴ・アロンソさん、その国の言葉を勉強するには、その国の文化を受け入れて丸ごと勉強することが大切で、「失礼」という言葉を身振り手振りをそえてとても楽しく話してくださいました。

川崎ライオンズクラブ優秀賞、台湾の柳燕玉さん、きれいな声で、「桃太郎」の歌を自然な日本語で歌って、美しく豊かな日本に憧れいっぱいであたという話からスタートし、印象が随分違うことになったこと。日本を見て「完全な国」なんてないことを痛感し、改めて自分の国の良さを考え直させられ、日本人にも、もっと自分達の国の良さを知って欲しいと訴えてくださいました。

国際交流協会特別賞、ミャンマーのエンソーさん。自分が毒蛇にかまれた際、お母さんが口で毒を吸い取り病院へ付き添ってくれた話で、命の有難味やお母さんの優しさ・愛について初めて気がついたことを落ち着いて話され、私達に訴える力をもっていたと思います。

ライオンズクラブ特別賞、中国の劉麗虹さん、電車の中の日本人を捉えて、驚いたり、学んだりとすることが多いということ。また日本の良い所として「すみません」という言葉をよく耳にし、そこでコミュニケーションが上手くいっているのを感じ、自分も使うようにしていると、話してくださいました。

6名の努力賞の方々もみなさん淀みのない落ち着いた話ぶりで、素晴らしかったです。

ネパールのサブコタ・サラソティさんも8ヶ月という短い滞在で、はっきりとした綺麗な日本語で素晴らしかったです。